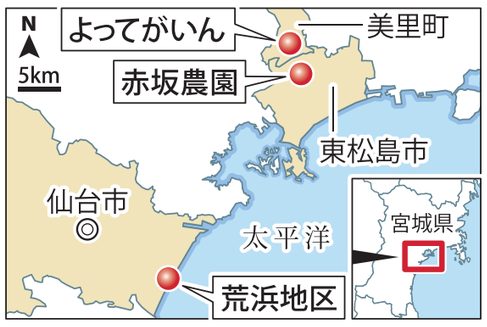
絆が紡ぐ北限の綿花

ふわりとした新雪のような真っ白な塊をまとった低木が一面に並ぶのは、東松島市大塩寺沢の「赤坂農園」。塊は木綿糸の原料になる綿花。名前こそ花だが正確には「実」で、中には種もある。国内有数の50アールほどの栽培面積があり、「北限の綿花」と呼ばれている。両手でつまんで引っ張ると、文字通り「糸を引く」ように、絡み合った繊維が細く長く伸びる。

熱帯から亜熱帯を原産とし、国内ではほとんど作付けされていない綿花の畑が東北に生まれたきっかけは2011年の東日本大震災だった。

農園主の赤坂芳則さん（73）＝宮城県美里町＝は、東松島以外にも耕作地を有し、その一つが仙台市若林区荒浜にあった。津波は丹精込めた土を流出させ、海から運ばれた砂とともに一帯をがれきの山に変えた。海水はなかなか引かず、残った耕作土に塩分が浸透していった。震災から3カ月後、赤坂さんのもとにアパレル業界の関係者が訪れ、「被災した圃場で、塩害に強い綿を作ってみないか」と提案があった。



仲間の農家に相談すると興味を示してくれ、「コメを作れないなら、やってみよう」と話がまとまった。全国からボランティアが集まり、同年7月、「東北コットンプロジェクト」が始動した。稲作ができなくなった土地で綿花を育て、糸を紡ぎ、商品化を通じて被災地を支援する狙いだ。

11年の夏は暑く、生育は順調だったが、豪雨に見舞われて畑が水浸しになり、初年の収穫はわずか。12年も梅雨の長雨で苦戦した。雑草対策と土の保温を兼ねた農業用シートの導入など試行錯誤を経て、収量が安定するまで5年かかった。その後は段階的に水田の復旧が進み、塩害対策は役割を終えたことから荒浜の作付面積は縮小した一方、震災を機に生まれた絆を生かそうと、現在は赤坂農園のほか、名取市の農家らが作付けを続けている。

たわわに実った綿花を摘み取るボランティア。アパレル業界の関係者らが全国から訪れた

赤坂農園 ―― 東松島市

支援 地域活性化にシフト

23年11月、赤坂農園の畑に各地のアパレル関係者が集まり、綿花の収穫体験に汗を流した。綿花を用いた地域活性化を目指す全国の関係者が集う「サミット」が東松島市で開かれたのに合わせ、ボランティアで収穫を手伝ってくれた。プロジェクト開始から10年余りを経て「被災地を支援する」枠組みを脱却し、各地の中小企業が手を携え、国産コットンのブランド化へのシフトを進めている。

これまでに、ジーンズなどの衣類、タオルや手ぬぐい、布マスクなどが商品化された。赤坂さんは「東北の気候で綿花が育つと実証できたので、まちおこしにも役立てたい。栽培法を紹介し、綿花を栽培してもらい、それを集めた特産品に育てたい」と夢を描く。

かつて牧場として開墾した土地を綿花畑に生まれ変わらせた赤坂さん

宮城県産の綿花を原料に用いたタオル製品が買える「直売所よってがいん」

直売所よってがいん
0229（58）2105
宮城県美里町二郷字前谷地114
営業時間は月曜から土曜の午前9時～午後5時

震災後間もない時期に仙台市若林区荒浜地区で行われた綿花の植え付け。現在、この土地では水稲の作付けが再開されている

能登地震に寄せて

支援のタイミング注視

「東日本大震災の前から、大災害が起きると自分にできることは何かと考え、不便な環境でも力をつけてもらいたく、うちで作っているものから、湯通しするだけで食べられる餅などを送ってきた。今回の地震があってすぐに支援物資の受け入れについて問い合わせたが、個人の食料支援は受けていないとのことで、どのようなタイミングで何ができるか、引き続き関心を持って見守っていきたい」　（赤坂芳則さん）